

まるにふたつぎき
丸に二つ引き



一色氏は清和源氏義家流足利義氏の惣領足利三郎宮内少輔泰氏の七男公深を祖として三河の吉良莊一色村（現・愛知県西尾市一色町）を領知していたので、一色姓を称する。母は櫻井判官源氏玄の女、一色宮内卿公深公は後に剃髪して一色阿闍梨と号する。



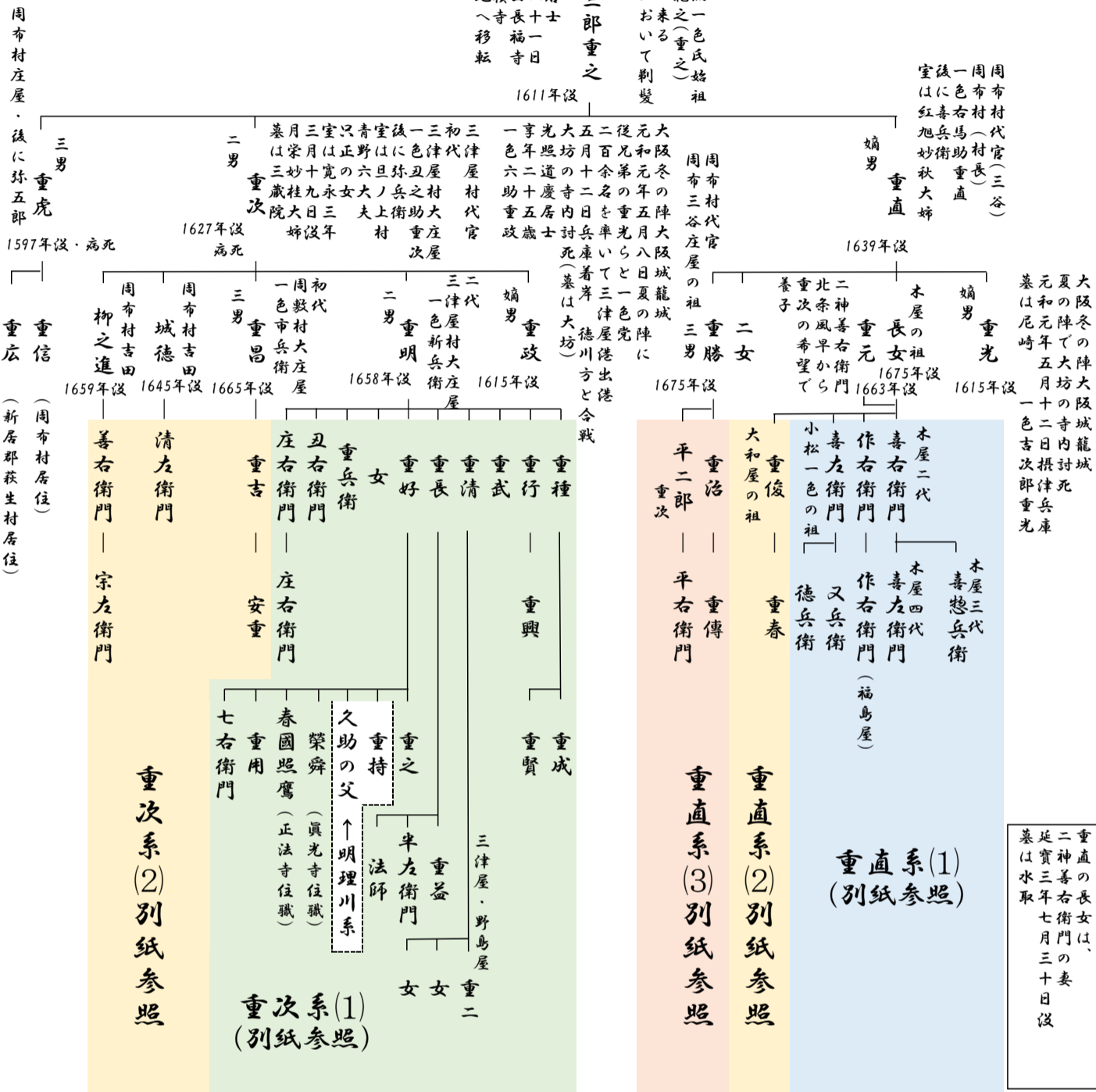
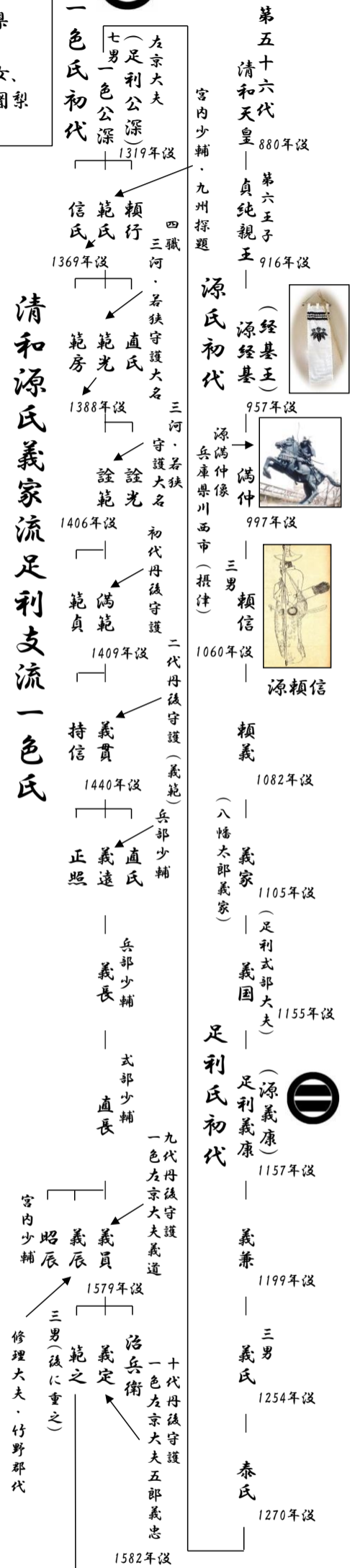
まるにふたつぎき
丸に二つ引き

豫州三津屋重之流一色氏始祖
天正八年（1580年）五月、一色右馬三郎重之は、母後國守一色左京大夫義員（義道）の三男、母は豫州宇摩郡の河野（村上）通泰の女。

一色右馬三郎重之（後の重之）は、第九代母後守護一色左京大夫義員（義道）の三男。母は豫州宇摩郡の河野（村上）通泰の女。

豫州三津屋一色右馬三郎重之家系図

清和源氏義家流足利支流一色氏



重直の長女は、二神善右衛門の妻、延寶三年七月三十日没、墓は水取

重直の二女は、見五左衛門に嫁す、屋敷見五左衛門に

重直の三女は、見五左衛門に嫁す、屋敷見五左衛門に

重直の四女は、見五左衛門に嫁す、屋敷見五左衛門に

重直の五女は、見五左衛門に嫁す、屋敷見五左衛門に

重直の六女は、見五左衛門に嫁す、屋敷見五左衛門に

重直の七女は、見五左衛門に嫁す、屋敷見五左衛門に

重直の八女は、見五左衛門に嫁す、屋敷見五左衛門に

重直の九女は、見五左衛門に嫁す、屋敷見五左衛門に

重直の十女は、見五左衛門に嫁す、屋敷見五左衛門に

天正8年(1580年)、戦国武将一色右馬三郎重之(後の一色右馬三郎重之公)は母後國守三津屋(現・京都府宇治市)の落城前に外祖父である河野通泰(村上通泰)との縁により、子の重直、重次(6歳の双子)、家臣赤澤某、伊藤嶋之助、佐和小十郎等十余名を連れ、豫州宇摩郡へ来た。

一族は当時新居郡の旗頭であった高崎城(高外木城・カキ)石川通清氏の食客となり新居郡荻生村に居位。その後、桑村郡旦ノ上村へ転位。そして、足利氏の流れを汲む同族の旦ノ上村の青野六太夫只正の娘を重次の嫁に迎え縁者となった。

天正18年(1590年)5月摂津麻田藩青木一重の代官となっていた武士重之公は、命により古城に居た周郡北条村の地頭越智勘左衛門を討って移り住み、そこを「三ツ屋」と称した。

又、文禄2年(1593年)5月13日一色右馬三郎重之公は代官となっていた次男の武士重次、嫡男の武士重直らと共に周郡周郡村三谷城主の荒井藤四郎考宣(ナリキ)を討った。

(秀吉の朝鮮出兵の軍費の爲か、新領主による過酷な年貢の取立てがあったようで、一揆を企てた三谷城主の荒井氏を攻め滅ぼした。道前一揆である)

そして、重之公の嫡男である重直が三谷城主となり、重直は周布、重次は三津屋を治めた。

重直 一色右馬助 後に喜兵衛と称す(法名 元眞宗廣居士 寛永16年(1639年)9月7日卒)

重次 一色丑之助 後に弥兵衛と称す(法名 盛月閑光居士 寛永4年(1627年)7月22日卒)

その後、一色家は三津屋村・周布村・壬生川村・明理川村の四か村で庄屋を務めた。